

# シネマ通信

第17号(2025年4月16日)



## マリア・モンテッソーリ 愛と創造のメソッド

監督・脚本:レア・ドロフ

脚本:カトリーヌ・バイエ

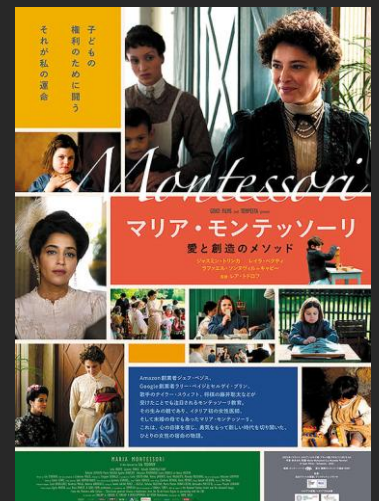
出演:マリア・モンテッソーリ/ジャスミン・トリンカ「息子の部屋」

リリ・ダレンジ/レイラ・ベクティ「シンク・オア・スイム」

20世紀初頭のローマで、自らの生き方を希求する二人の女性が運命的に出会う。一人は、現代まで引き継がれる画期的な教育法を生み出したマリア・モンテッソーリ。もう一人は、フランスの有名な高級娼婦リリ・ダレンジ。リリは娘の学習障害が発覚しそうになり、自分の名声を守るためにパリから逃れてきたのだ。リリはマリアの教育法を通じて、娘はただの障害児ではなく、強い意志と才能をもった一人の人間であることに気づいていく。そして、マリアに共鳴したリリは、男性中心の社会で苦闘するマリアの夢の実現に、自らの後半生を賭けて協力するのだった。イタリア初の女性医師であり、未婚の母であり、子どもの生来の力に、初めて注目した教育者であるマリア・モンテッソーリ。その無私の愛と、不屈の魂の記録。

第17回鑑賞作品

男性中心の社会で  
子どもの権利のために  
闘った若き女性医師  
その姿に、何を学ぶか？



## About Them

「マリア・モンテッソーリ」は、女性の、女性による、女性のための？映画です。マリアを演じたジャスミン・トレンカは、1981年のローマ生まれ。リリ役のレイラ・バクティは、アルジェリア系だが1984年のフランス生まれ。脚本のカトリーヌ・パイエは1980年、これが長編劇映画初監督となるレア・トドロフは1982年、共にフランスで生まれています。何と、全員が“アラフォー”世代。若さとキャリア、双方を併せもつことの出来るゴールデン・エイジの4人の才能が、偉大な先人に触発され、共鳴しあって生まれたのが本作です。

日本では、まだ無名に近いレア・トドロフ監督ですが、「勤務時間中の人類を救う」「戦争回想録」などのドキュメンタリー作品で、高く評価されています。父は、ブルガリア出身の哲学者でルソー賞を受賞したツヴェタン・トドロフ。母はカナダ出身の小説家でフェミナ賞を受賞したナンシー・ヒューストンという、まさに、サラブレッド。純粋培養された才知で、映画界にどんな新風を巻き起こすのか、期待が高まります。



## About Something

本年度のアカデミー主演女優賞は、「シネマ通信」第16号でとりあげた『ザ・ルーム・ネクスト・ドア』のティルダ・スワintonと確信していたのに、何故か、彼女は候補にもあがりませんでした。代わって同賞を受賞したのは、若手の上昇株、『ANORA アノーラ』のマイキー・マディソン。本作は主演女優賞のみならず、作品賞、監督賞・脚本賞・編集賞(すべてショーン・バイカー)と最多5部門を受賞し、アカデミーの夜を席卷しました。『ANORAアノーラ』は、大富豪令息と娼婦との恋物語という、往年のヒット作『プレティ・ウーマン』を思い浮かべる方も多いことでしょう。でも、この2作は、人物設定も映画の雰囲気もまるで異なっています。後者はファッションもセリフもお洒落な都会のおとぎ話でしたが、本作はリアリティあふれる恋の顛末です。アノーラは、ロシア移民三世で売れっ子のストリップダンサー。ある日、ロシア語が多少話せるという理由で、ロシア新興財閥の息子イヴァンの相手をするようになります。会話に飢えていたイヴァンは、明るく優しいアノーラを気に入り、独占契約を結ぶ。しかし、イヴァンの両親の豪邸で共に暮らすうち、互いに離れがたくなり……。そのテーマからセックスシーンが多いのはうなずけますが、不思議なほどに娼婦のアノーラが極めて健康的。磨き上げたダンサーとしての動きも心地良い。この全くニュータイプのヒロインが、その新鮮さで多くのアメリカ市民を惹きつけたのも納得です。映画の終盤には大富豪夫妻が登場しますが、パパのキャラが面白い。セリフはほんの数語ですが、存在感が抜群。一代で財をなした夫婦の歴史が垣間見られ、作品に奥行きを与えています。脚本も自ら書くバイカー監督の、まさに力量の一端といえるでしょう。授賞式の折にバイカー監督は、制作に協力してくれたセックスワーカーの人々に深い感謝と敬意を表明。彼らは社会から不当な扱いを受けている。彼らの多くは真摯に仕事に向き合う立派な職業人だとスピーチし、満場の拍手となりました。なんと大らかなハリウッド！！世に先駆けて、黒人俳優を積極的に起用し、同性カップルもポジティブに描いてきた近年のハリウッド！！それなのに、何故、あの秀作『ザ・ルーム・ネクスト・ドア』が、どの部門にもノミネートされなかったのか？推される理由はただ一つ。神の意志に反する尊厳死を、美しく描きすぎたからではないでしょうか？先進科学もARTも侵すことの許されないこの聖域。その重さを改めて感ずる授賞式でした。

文責 安東桂子